

科目名	途上国社会経済論	2単位
担当者	秋吉 恵	
テーマ	途上国の貧困者が抱える課題を知り、その分析や処方箋、開発政策を学ぶ	
科目のねらい	<p>&lt;キーワード&gt; 途上国 都市 農村 貧困 労働移動 グローバル市場 地域社会 開発政策</p> <p>&lt;内容の要約&gt; 本科目では、発展途上国の社会経済開発の諸問題について学ぶことを目的とする。ただし、途上国が直面する開発問題は多様なため、本科目では、貧困層の7割が居住するとされる途上国農村の小農をめぐる開発問題に焦点を絞る。 テキストを元に「アスー国という架空の途上国を舞台に、そこで暮らす小農一家や彼らに行政サービスを提供する若い官僚の物語を用いて、日々の生活から浮かび上がる開発課題をどのように開発経済学が考え、解決策や政策を導き出すのか」を考える。 これに途上国が抱える社会構造の影響を補足するため、途上国でグローバル商品を生産する小農ら4つの事例を取り上げ、彼らが1980年代以降、グローバルな市場と直接間接につながることで、どのようなインパクトを受けたかを考える。</p> <p>&lt;学習目標&gt;</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 途上国の貧困者が抱える課題とその実情を分析するための理論を理解できる。</li> <li>・ 途上国の各地域における小農や貧困層をめぐる社会のありようを多角的に分析できる。</li> <li>・ 各人のそれまでの現場の経験や実践事例を、相対化するための視点を持つ。</li> </ul>	
授業の進め方	<p>講義では、第1回から第15回までを、以下の内容で実施する。第2, 3, 4, 5, 9, 11, 12, 13回はテキストの当該章を、第6, 7, 8, 10回は指定された論文について学ぶ。履修生は各章もしくは論文の要約と疑問点の提示、疑問点についての議論を行う。</p> <p>第1回：オリエンテーション：本科目の狙いと、教員および各受講生について共有する。 第2回 プロローグーある途上国のお話 第3回 第1章 農業ー伝統的の制度に秘められた知恵 第4回 第2章 農村信用市場ー多様化する農村経済とマイクロファイナンス 第5回 第3章 教育と健康ー人づくりは国づくり 第6回 *グローバル化と小農：商品作物「エチオピアのコーヒー」 第7回 *グローバル化と小農：畜産物「タイの養鶏」 第8回 *グローバル化と漁家：水産物「ミャンマーのエビ」 第9回 第4章 労働移動ーバラ色の新天地？ 第10回 *グローバル化と労働者 第11回 第5章 経済成長と工業化ーグローバル化した世界 第12回 第6章 技術移転ー学びの道も一歩から 第13回 第7章 開発金融ーおらが村とグローバル金融システムのつながり 第14, 15回 学びのふりかえり農漁村部小農・漁家や都市部貧困層に対するグローバル化の影響について考える&lt;履修生からの発信と議論&gt;</p>	
事前学習の内容・学習上の注意	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 第1回授業でテキストの各章および指定する論文の中から、受講生は各自、担当したい回を選ぶ。</li> <li>・ 各回の担当者は、指定された回に、当該テキストの各章及び論文の要約と疑問点を掲示板に提示する。</li> <li>・ 各回で取り上げられるテキストを、事前に読み込み、テキストの各章及び論文内容に対する自分の経験や知識に基づくコメントを掲示板に提示する。</li> <li>・ 受講生は、自らが研究対象としている国や地域、人々を念頭において、課題や議論に参加することが望まれる。</li> </ul>	
本科目の関連科目	開発研究入門、地域社会システム論、地域社会開発論、開発組織・制度論	

<b>テキスト</b>	<p>黒崎卓, 栗田匡相 (2016) 『ストーリーで学ぶ開発経済学-途上国の暮らしを考える』 有斐閣・・・紙媒体と Kindle 本、双方で購入可能。 本書の内容は、以下の筆者による本書執筆の動機を参照ください。 <a href="http://www.yuhikaku.co.jp/static/shosai_mado/html/1607/09.html">http://www.yuhikaku.co.jp/static/shosai_mado/html/1607/09.html</a></p>
<b>参考文献</b>	<p>途上国各国の小農、漁家、労働者に関わる公表論文を掲示板や資料ページに提示し、各履修生がダウンロードして使用する。</p> <p>第3回 第1章 エチオピアのコーヒー生産者とフェアトレード 第5回 第7章 アグリビジネスによる契約養鶏と東北タイの農家経済 第6回 第6章 ミャンマーにおけるエビ輸出拡大と小規模漁民 研究叢書『グローバル化と途上国の小農』アジア経済研究所 ISBN978-4-258-04560-0 の3つの章を、参考文献として使用する予定である。本論文は、アジア経済研究所の Web サイトからダウンロード可能。 <a href="http://www.ide.go.jp/Japanese/Publish/Books/Sousho/560.html">http://www.ide.go.jp/Japanese/Publish/Books/Sousho/560.html</a></p> <p>第10回 黒崎卓「インド・デリー市におけるサイクルリキシャ業：都市インフォーマルセクターと農村からの労働移動」『経済研究』64(1) January 2013. <a href="http://hermes-ir.lib.hit-u.ac.jp/rs/bitstream/10086/25878/1/keizaikenkyu06401062.pdf">http://hermes-ir.lib.hit-u.ac.jp/rs/bitstream/10086/25878/1/keizaikenkyu06401062.pdf</a></p>
<b>成績評価方法と基準</b>	<p>各受講生が担当する章および論文の要約、疑問点、コメントの提示 (40 点) 提示された要約等に対する自分の経験や知識に基づくコメントなど、議論への参加度 (30 点) 期末レポート (30 点)</p>

科目名	開発組織・制度論	2 単位
担当者	雨森孝悦	
テーマ	貧困な人びとの行動を理解し、貧困削減につなげる	
科目のねらい	<p>&lt;キーワード&gt;</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 貧困削減政策</li> <li>2. 厳密な評価</li> <li>3. 行動経済学</li> <li>4. 起業</li> <li>5. マイクロファイナンス</li> </ol> <p>&lt;内容の要約&gt;</p> <p>貧困な人々の実際の姿や行動については何十年もの間、研究や実践が積み重ねられてきた。にもかかわらず、かならずしも真相に迫ることができていなかった。</p> <p>この科目では、急速に発達しつつある行動経済学によって明らかにされてきた貧困な人びとの行動特性について学ぶ。テキストで扱われている題材は保健、教育、人口問題、マイクロファイナンス、起業、ガバナンスなど多岐にわたる。どの領域においても、豊富で緻密な実証分析に加え、フィールド調査によって裏付けられた、目から鱗の落ちる記述がある。語り口は平易で難しい数式も出てこないが、精読しないと著者の真意は伝わらないだろう。この良書をみんなで読み込み、主要な論点について議論を行い、貧困対策のフロンティアに赴きたい。</p> <p>&lt;学習目標&gt;</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 履修者は、貧困な人々の実際の行動に関する新しい理論と知見の基礎を理解する。</li> <li>・ 履修者は、貧困削減を目指す政策や制度の設計にあたり、留意すべき点について理解する。</li> </ul>	
授業の進め方	<p>第1回 はじめに (オリエンテーション)</p> <p>第2回 第1章 もう一度考え直そう、もう一度 (第1部 個人の暮らし)</p> <p>第3回 第2章 10億人が飢えている?</p> <p>第4回 第3章 お手軽に(世界の)健康を増進? (前半)</p> <p>第5回 第3章 お手軽に(世界の)健康を増進? (後半)</p> <p>第6回 第4章 クラスで一番 (前半)</p> <p>第7回 第4章 クラスで一番 (後半)</p> <p>第8回 第5章 スダルノさんの大家族 (前半)</p> <p>第9回 第5章 スダルノさんの大家族 (後半)</p> <p>(第2部 制度)</p> <p>第10回 第6章 はだしのファンドマネージャ</p> <p>第11回 第7章 カブールから来た男とインドの宦官たち (前半)</p> <p>第12回 第7章 カブールから来た男とインドの宦官たち (後半)</p> <p>第13回 第8章 レンガひとつずつ貯蓄起業家たちは気乗り薄 (前半)</p> <p>第14回 第9章 起業家たちは気乗り薄 (前半)</p> <p>第15回 第9章 起業家たちは気乗り薄 (後半)</p> <p>第16回 第10章 政策と政治 (前半)</p> <p>第17回 第10章 政策と政治 (後半)</p> <p>※履修者の人数によって進め方を変える可能性もあります。</p>	
事前学習の内容・学習上の注意	<p>テキストをできるだけ早く入手し、事前に読んでおくこと。自分の担当する章だけでなく、すべてを予め熟読することが議論参加の前提となる。</p>	

<b>本科目の 関連科目</b>	マイクロファイナンス論
<b>テキスト</b>	アビジット・V・バナジー／エステル・デュフロ著 (2012) 『貧乏人の経済学 もういちど貧困問題を根っこから考える』 みすず書房
<b>参考文献</b>	Banerjee, Abhijit V., and Esther Duflo (2011) <i>Poor Economics: A Radical Rethinking of the Way to Fight Global Poverty</i> , Public Affairs. (英文原著) J. モーダック他 (2011) 『最底辺のポートフォリオ 1日2ドルで暮らすということ』 みすず書房 Glennerster, Rachel, and Kudzai Takavarasha (2013), <i>Running Randomized Evaluations: A Practical Guide</i> , Princeton University Press その他、授業中に適宜、参考文献を示す。
<b>成績評価方法 と基準</b>	成績評価は、この授業への参加度と期末レポートをもとに行う。 1) 期末レポート (60点) 2) ディスカッションへの参加と貢献 (40点) 総合評価 60点以上を合格とする。ただし、最低限の回数の発表と議論を行うことが前提であり、それをしないと期末レポートの提出権がない。

科目名	地域社会システム論	2単位
担当者	斎藤 千宏	
テーマ	アフリカの地域社会組織を理解し開発支援実践に活かそう。	
科目のねらい	<p>&lt;キーワード&gt;地域社会システム アフリカの「地域社会」 参加型開発 公共圏</p> <p>&lt;内容の要約&gt; 経済自由化や民主化が歴史的にも文化的にも異なる背景をもつアフリカ各国に導入されてきた。その過程において異なる政治経済構造の下、農村地域社会はどのように対応したか、またどう対抗してきたのかを、「公共圏」の議論を踏まえながら検討し学ぶ。</p> <p>&lt;学習目標&gt; アフリカの地域社会を開発事業と関連付けて理解できる。 社会科学的方法論に基づきフィールドワークを設計・実施できる。 アフリカ以外の地域での開発支援活動でも応用がきくようになる。</p>	
授業の進め方	<p>第1回～第5回 パート1 アフリカの地域社会を中心に討論。 第6回～第9回 パート2 市場化の影響と地域開発組織を中心に討論。 第10回～第14回 パート3 政治と地域開発組織を中心に討論。 第15回 まとめ</p>	
事前学習の内容・学習上の注意	国内であれ国外であれ地域社会とかかわって仕事をしたことがある人は、自身の経験を整理しておくこと。テキストの舞台がアフリカなので、アフリカで活動いたことがある履修生討論をリードしてくれることを望みます。	
本科目の関連科目	参加型開発論、地域社会開発論など	
テキスト	『現代アフリカ農村と公共圏』児玉由佳編、アジア経済研究所、2009年	
参考文献	『福祉社会開発学の構築』とくに第8章（余語トシヒロ著）、日本福祉大学 COE 推進委員会編、ミネルヴァ書房、2005年	
成績評価方法と基準	ディスカッションへの参加度（40%）、提出レポート（60%）をもとに評価を行い、全体で60ポイント以上を獲得した者は合格とする。	

科目名	開発経済論	2単位
担当者	森澤恵子	
テーマ	現代の開発経済学が対象とする多様なトピックを経済成長と貧困削減という軸足から概観し、開発経済学の全体像に迫る。	
科目のねらい	<p>&lt;キーワード&gt;          経済成長、貧困削減、制度、開発政策、経済協力、農村開発</p> <p>&lt;内容の要約&gt;          著しく研究の進んでいるマイクロ開発経済学の対象領域の外にある、広範な開発経済学の諸領域について、テキストを手引きにして理解を深める。貧困削減にとって必要な開発経済学の諸領域（経済成長、貿易と投資、社会資本、経済制度、政治制度、開発政策、経済協力等）の重要性を理解する。</p> <p>&lt;学習目標&gt;          1. 貧困削減にとって経済成長は重要な要因であるが、マクロ理論自体の理解は目的ではない。貧困削減にとって必要な開発経済学の広範な諸領域の存在を理解する。          2. 開発経済学にとって、有効な一般理論は無く、その時々の開発の諸課題に直面することによって、理論構築が進められたことを理解する。</p>	
授業の進め方	第1回 導入 第2回 開発途上国の経済発展 『開発経済学入門 第1章』 第3回 新古典派経済成長論 『開発経済学入門 第2章』 第4回 内生的経済成長論 『開発経済学入門 第3章』 第5回 貧困の罍 『開発経済学入門 第4章』 第6回 中所得国の罍 『開発経済学入門 第5章』 第7回 国際貿易・海外直接投資 『開発経済学入門 第6章』 第8回 産業集積 『開発経済学入門 第7章』 第9回 社会関係資本 『開発経済学入門 第8章』 第10回 社会・経済制度 『開発経済学入門 第9章』 第11回 経済発展の政治経済学 『開発経済学入門 第10章』 第12回 農村開発 『開発経済学入門 第11章』 第13回 農村金融 『開発経済学入門 第12章』 第14回 経済協力 『開発経済学入門 第13章』 第15回 総括	
事前学習の内容・学習上の注意	指定したテキスト『開発経済学入門』の各章を講義の進行に合わせて、講義の前に読んでおくこと。テキストにも書かれているように、マクロ経済学、マイクロ経済学の素養は必要ありません。テキストの中の数式や図式は、その意味するところだけを理解できれば十分です。参考文献『開発の政治経済学』を講義の進行につれて、講義の内容と関連する箇所を読んでください。理解が深まります。	
本科目の関連科目		
テキスト	『開発経済学入門』戸堂康之、新世社、2015年	
参考文献	『開発の政治経済学』絵所秀紀、日本評論社、2001年	
成績評価方法と基準	担当箇所の報告と問題提起（50%）、質疑応答への参加（50%）	

科目名	開発のミクロ経済学	2単位
担当者	岡本真理子	
テーマ	発展途上国の諸事象をミクロ経済学で読み解く	
科目のねらい	<p>&lt;キーワード&gt; ミクロ経済学、貧困世帯の家計、個人の選択、問題解決、インセンティブ</p> <p>&lt;内容の要約&gt; 資金や人材の制約が多い発展途上国で、当事者に良い行動を促すインセンティブをどのように制度に内蔵するのかということ、開発関係者によってかなり重視されるようになってきた。この制度設計において、発生した問題をミクロ経済学的視点から分析することが役立つ。この科目では、発展途上国に特徴的な組織や制度のもとで生じる諸問題は、これらの担い手が、ある条件下で、それなりの合理性をもって選択し行動した結果であるとの前提にたち、それらの事象をミクロ経済学的分析を通して深く理解し、また分析の枠組みを身につける。将来博士課程を本学や他大学で目指す院生は受けておいた方がよい。</p> <p>&lt;学習目標&gt;</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ミクロ経済学の基本を理解する。</li> <li>・途上国の諸問題の背後にある要因や発生のメカニズムを理解する。</li> <li>・現地の問題解決において、適切な選択肢を考えることができる。</li> </ul>	
授業の進め方	<p>テキストのすべてではなく、ミクロ経済学が適用されている章を選んでいきます。 ( )内は、そこで主に問題とりあげたいトピックです。</p> <p>第1回 導入とウォーミングアップ課題 第2回 ウォーミングアップ問題の回答 第3回 零細自営業者や小農の経済学 (貧しい世帯の家計を理解する) 第3回 関連トピックと議論 第4回 途上国の信用市場 (なぜ貯蓄や融資が必要か) 第5回 関連トピックと議論 (情報の非対称性) 第6回 貧困層の賃金はなぜ低いままか 第7回 関連トピックと議論 (児童労働) 第8回 貧困層への援助 (支援策の妥当性) 第9回 関連トピックと議論 第10回 マイクロ・クレジットの経済学 第11回 関連トピックと議論 第12回 共同体と開発 (「コモンズの悲劇」) 第13回 関連トピックと議論 第14回 開発とガバナンス (汚職問題) 第15回 関連トピックと議論</p>	
事前学習の内容・学習上の注意	<p>ミクロ経済学の基本概念は経済学出身者以外にはなじみがないかも知れない。しかし、インターネット上で検索すると解りやすい解説が出回っているので、テキストや議論で基本概念に関わる用語に出会ったときに、解説サイトをいくつか見比べて入手してほしい。また、小さなことでも解らないことがあれば積極的に質問してほしい。</p>	
本科目の関連科目	マイクロファイナンス論、開発制度論	
テキスト	黒崎卓・山形辰史著『開発経済学』日本評論社、2003年	
参考文献	<p>バナジー&amp;デュフロ著『貧乏人の経済学』2012 みすず書房 清水克俊・堀内昭義『インセンティブの経済学』2003 有斐閣 ダン・アリエリー『嘘とごまかしの行動経済学』2012 早川書房</p>	
成績評価方法と基準	担当箇所への報告 (50%)、質問や討議への参加 (50%)	

科目名	参加型開発論	2 単位
担当者	野田直人	
テーマ	外部者が計画を立てて主導する開発アプローチは、不確かな仮説が入りやすく機能しない場合が多い。外部者は、当事者が主体となる参加型開発をサポートする役割を担うべきである。	
科目のねらい	<p>&lt;キーワード&gt; 参加型開発、内発の開発、住民主体、仮説のマネージメント</p> <p>&lt;内容の要約&gt; 参加型開発は言葉やイメージが先行し、手法やツールを駆使して住民の参加を促すことだと思われがちだが、そうではない。住民にとっては生活そのものが開発のプロセスでありそこに外部者がどうかかわり、交わりを持つか、その時に外部者がどのように考え、どのような態度をとるかが参加型開発でもっとも重要な点である。</p> <p>参加型開発の意味を理解するために、まず発展途上国におけるコミュニティの状況について理解する。開発協力の流れの中から、どのようにして参加型開発の概念が生まれてきたかを学ぶ。さらに住民の主体的参加とは何であるかを考え、その障害となる「専門家（受講生）の思い込み」に焦点を当て、パラダイムシフトの実現を試みる。また、コミュニティにおいて参加型開発を実践する際に必要となる、実践的な社会経済学的な基礎知識を身につける。</p> <p>&lt;学習目標&gt; 開発協力の前提となる発展途上国のコミュニティの特質を理解する。 参加型開発の意味と外部者の役割を理解する。 計画に伴う仮説の分析ができる。 コミュニティ開発における基礎的な社会・経済的な分析ができる。</p>	
授業の進め方	第1回 地域コミュニティとは 第2回 地域コミュニティ開発で優先すべきこと 第3回 参加型開発とは 第4回 参加型開発における外部者の役割 第5回 仮説分析の説明 第6回、7回、8回 仮説分析の演習 第9回 仮説と参加型 第10回 仮説分析の演習 第11回 仮説を避けるためのアプローチ 第12回 参加型開発のアプローチ 第13回 地域コミュニティ開発の社会経済学 第14回 PRRIE モデル 第15回 質疑応答と課題の解説	
事前学習の内容・学習上の注意	講義開始時に指定のテキストを通読すること。 参考文献の内どれか少なくとも一冊を読むことが望ましい。	
本科目の関連科目		
テキスト	『地域コミュニティ開発 参加型開発・コミュニティの社会経済』（国際協力の教科書シリーズ5）	
参考文献	1. 『参加型開発と国際協力：変わるのはわたしたち』ロバート・チェンバース著、明石書店、2000年 2. 『開発フィールドワーカー改訂版』野田直人著、有限会社人の森、2016年 3. 『機会均等の研修実施によるコミュニティ開発 PRRIE アプローチの基礎と実践』野田直人著、有限会社人の森、2017年	
成績評価方法と基準	レポートのみで評価する。100点満点で60点以上を合格とする。講義の内容を正しく理解できていれば60点とし、自らの知見が加えられていたり、実際の案件の分析が正しく行われていたりすればその分を評価して加点する。 レポートでは自らの経験や関係する実例を題材にすることが推奨されるが、該当する案件がない場合、適当な文献を選び、その分析を行うこととする。	



科目名	開発評価論	2 単位
担当者	吉村 輝彦	
テーマ	「評価」の考え方を改めて見つめ直し、同時に、「評価」の視点から今後の開発や地域づくりのマネジメントのあり方を構想する。	
科目のねらい	<p>&lt;キーワード&gt; 評価、アウトプット、アウトカム、プロセス、地域マネジメント</p> <p>&lt;内容の要約&gt; 近年、政策、計画や事業・プロジェクトの進行管理を行うことは極めて重要になっている。政策、計画や事業の実施過程を、定期的にモニタリングし、どれだけ個別施策や事業が実施され、どの程度計画目標や成果目標が達成されたのかということ、計画→実施→評価→改善というPDCAサイクルにおいて継続的に「評価」していくことにより、効果的な実施と運用が求められている。実際に、「評価」は、幅広い領域で、その必要性和意義が認識され、様々な「評価」が行われている。この「評価」に関しては、誰が、何のために、どのような射程を持って、どのような観点/視点から評価を行うのか、また、プロセスの評価をどのように行うのか等様々な論点がある。</p> <p>本科目では、「評価」の考え方を改めて見つめ直し、同時に、「評価」の視点から今後の開発や地域づくりのマネジメントのあり方を考える。</p> <p>&lt;学習目標&gt;</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・「評価」に関わる基本的な事項や現状を理解できる。</li> <li>・「評価」の視点から履修者自身の視点や取り組みを相対化し、それぞれが直面している状況を深化させる機会にしていけることができる。</li> <li>・「評価」の視点から今後の開発や地域づくりのマネジメントのあり方を構想できる。</li> </ul>	
授業の進め方	<p>■第1回 ガイダンス (WEB 掲示板での議論)</p> <p>■第2回～第3回 「評価」の定義やその意義をめぐる議論 (WEB 掲示板での議論)</p> <p># 評価の定義や意義について、履修者が発題し、その内容を共有するとともに、議論する。</p> <p>■第4回～第11回 テキストに基づく発表と議論 (WEB 掲示板での議論)</p> <p># テキストをもとに、評価の理論的な側面及び実践事例について議論する。ここでは、評価の多様性を理解していく。議論では、具体的な事例に基づいて、理論的ならびに実務的な評価のあり方を検討する。適宜、評価に関わる参考文献や文書も使って議論を進める。</p> <p>第4回～第6回 「第I部 参加型評価とは」</p> <p>第7回～第11回 「第II部 参加型評価の実践」</p> <p>第12回～第14回 参考文献あるいは具体的な事例の評価文書に基づく発表と議論</p> <p># 参考文献について、考え方に焦点をあてて議論を進めること、あるいは、JICA等のプロジェクトに関わる具体的な事例の評価文書をもとに議論を進めることを想定している。</p> <p>■第15回 振り返り (WEB 掲示板での議論)</p>	
事前学習の内容・学習上の注意	<p>○指定したテキストを事前に読んでおくこと。</p> <p>○関心がある分野の評価の取り組みに関して、JICA等のプロジェクトでは、実際にどのように行われているのか、その内容について事前に確認しておくこと。</p> <p>○日頃から「評価」に関わるトピックスを意識しておくこと。</p>	
本科目の関連科目		
テキスト	<p>○メインテキスト：源由理子編著 (2016.11)「参加型評価」晃洋書房 (2,700円+税)</p> <p>○サブテキスト：三好皓一編 (2008.1)「評価論を学ぶ人のために」世界思想社 (2,000円+税)</p>	
参考文献	<p>○キャロル・H・ワイス、佐々木亮監修 (2014.3)「入門 評価学」日本評論社 (6,000円+税)</p> <p>○フェッターマン、ワンダーズマン編著、笹尾敏明監訳 (2014.1)「エンパワメント評価の原則と実践」風間書房 (3,500円+税)</p> <p>○佐々木亮 (2010.10)「評価論理」多賀出版 (2,800円+税)</p> <p>○安田節之・渡辺直登 (2008.7)「プログラム評価研究の方法」新曜社 (2,800円+税)</p> <p>○NPO法人アークス編 (2003.9)「国際協力プロジェクト評価」国際開発ジャーナル社 (1,500円+税)</p>	
成績評価方法と基準	<p>原則として、担当者あるいは指定討論者としての参加 (30%)、議論への参加度合い (30%)とレポート (40%)の方法で評価を行い、全体で60%以上を合格とする。</p>	

科目名	地域社会開発論	2 単位
担当者	平野隆之	
テーマ	地域共生社会を目指す開発の方法	
科目のねらい	<p>&lt;キーワード&gt; 地域共生、開発福祉、まちづくり、地域福祉</p> <p>&lt;内容の要約&gt; テキストを購読しながら、地域共生社会の開発を目指すための方法を実践事例のなかから修得することを目指す。テキストにおける事例は、地域における実践の観察によりまとめられたものにとどまらず、実践に研究者が関与するなかで得られた内容を含んでいる。その意味では、学習者はそのような視点で、実践事例を理解しつつ、自身の実践の客観的な分析にも役立たせることを目指す。</p> <p>&lt;学習目標&gt; 地域共生社会を目指す開発方法にどのような特徴をもつかを理解する。 地域課題や特性の違いを踏まえ、開発方法の適切な選択ができる。 地域社会開発に関する自身の実践の振り返りに役立たせ、事例研究を進めることができる。</p>	
授業の進め方	<p>各受講生が分担によるテキスト発表（10回）によって授業を進める。福祉の知識が多く求められるので、その点での解説を事前に行うように配慮する。発表内容については、自身の実践に関連した観点からの報告が多く含まれることも、有益と考えている。</p> <p>負担からも知れないが、著書前回は読了することを目指す。</p> <p>第1回 「はじめに」とテキストのスキャンニング（どの章に関心があるか）</p> <p>第2回～第3回 第1章 開発福祉という新たな概念の理解</p> <p>第4回～第5回 第2章 開発研究の視点から開発福祉を理解する</p> <p>第6回～第7回 第3～6章 集落福祉の挑戦のそれぞれの取り組みにみる生産と福祉の融合のための方法を比較検討する。</p> <p>第8回 各章の事例の分析方法について比較検討する。</p> <p>第9回～第10回 第7～8章 都市部における福祉とまちづくりの融合の比較検討を行う。</p> <p>第11回 第9章における韓国と日本の事例における福祉とまちづくりの比較検討を行う。</p> <p>第12回 第10章における被災地における地域社会開発の方法を学ぶ。</p> <p>第13回～第14回 第11章と第12章の障害分野における地域共生社会の開発方法を比較検討する。</p> <p>第15回 第13章と第14章において、地域共生の開発をケア（政策）から理解する。</p>	
事前学習の内容・学習上の注意	授業開始までに指定テキストを入手し、各自の興味を踏まえて担当を希望する章を検討しておくこと。テキストは入手に時間がかかる（在外からは特に）ため、受講予定者は、早目に手配しておくことが望ましい。	
本科目の関連科目	福祉社会開発論	
テキスト	日本福祉大学アジア福祉社会開発研究センター編『地域共生の開発福祉—制度アプローチを越えて』（ミネルヴァ書房）	
参考文献	穂坂光彦・平野隆之他『福祉社会の開発』（ミネルヴァ書房） 平野隆之・穂坂光彦・朴兪美編訳『地域アクションのちから—コミュニティワーク・リフレクションブック』（CLC）	
成績評価方法と基準	文献の講読による発表、議論への参加度（60%）、レポート（40%）の方法で行い、全体で60%以上を合格とする。ただし掲示板での投稿、議論に十分に参加されていることを、期末レポート提出の要件とする。	

科目名	環境計画論	2単位
担当者	千頭 聡	
テーマ	持続可能な開発と社会形成を実現していくための基盤となる環境の保全や管理・活用について、概念や基本的な考え方を学ぶとともに、ESD の考え方についても実践的に学びます。そして、環境（問題）に対して、我々がどう対応していくべきかを、院生相互の議論などを通じて考えていきます。	
科目のねらい	<p>&lt;キーワード&gt; 持続可能な開発(SD)、持続可能な開発のための教育(ESD)、環境共生、環境計画</p> <p>&lt;内容の要約&gt; 1992年の国連地球サミット以降、持続可能な開発を目指す様々な動きが進められているが、先進国と発展途上地域との格差は縮小せず地球温暖化防止をはじめとした取り組みは、必ずしも順調には進んでいません。そこで、改めて、人間社会との関係性の中で環境をどうとらえ、環境資源をどう公正に利活用していくべきなのかについて、根源的な概念を解きほぐした文献および近年の動向をもとに、皆さんと議論していきたいと思ひます。 また、2015年のユネスコESD世界会議などの成果も踏まえつつ、ESDの考え方と実践方法についてもテキストに基づいて議論したいと思ひます。</p> <p>&lt;学習目標&gt; 持続可能な開発およびESD、環境資源の管理と利用に関する理念的な枠組みが理解できるとともに、環境問題に対するアプローチの基本的な考え方を獲得することができる。</p>	
授業の進め方	<p>テキストのいくつかの章について、受講生で分担しながら、内容の紹介、議論すべきポイントの提起と受講生による議論により、環境計画という概念の共通理解を図ります。合わせて、院生自身の問題認識に基づき議論を深めていきます。</p> <p>第1回 ガイダンス 第2回から第7回 環境計画論の基本的考え方についてテキストを分担して解説 第8回から第12回 ESDに関して、テキストに基づき議論 第13回から第14回 MDGs から SDGs に至る動向について解説 第15回 まとめ</p> <p>なお、受講生の人数や関心領域に応じて、適宜、学習内容の変更やテキストの追加・変更を行います。</p>	
事前の内容学習上の注意	<p>○テキストの担当章については、事前に精読のうえ、内容の要約、議論のポイントなどを他の受講生に示し、議論を誘発するように取り組むこと。</p> <p>○担当章以外についても、あらかじめ一読し、自らの考え方をまとめておくこと。</p>	
テキスト	<p>○テキスト1：末石富太郎＋環境計画研究会(1993)「環境計画論」森北出版 (必要ヶ所のPDF化と配布を行う予定)</p> <p>○ テキスト2：名古屋市(2015)「ESDはじめての一步」 (PDFファイルを配布予定)</p> <p>○ その他、適宜関連資料を配布予定</p>	
参考文献	<p>今後、随時、情報提供していきますが、たとえば以下のような書籍があります。</p> <p>○ 小宮山宏編(2008)「サステイナビリティ学への挑戦」岩波書店(2,900円＋税)</p> <p>○ 松下和夫編著(2007)「環境ガバナンス論」京都大学学術出版会(4,200円＋税)</p> <p>○ 井上真・宮内泰介編(2001)「コモンズの社会学」新曜社(2,400円)</p> <p>○ 三村信男他編(2008)「サステイナビリティ学をつくる」新曜社(2,900円＋税)</p>	
成績評価方法と基準	原則として、担当者としての参加(40%)、議論への参加(30%)、最終レポート(30%)として、総合計で60%以上を合格とする。	